

ユーリイ・リベジンスキイの 20年代の創作と同時代人達

杉山 秀子

(I)

ソヴェートの国内戦後の復興期時代は文学の面では躍進の時代であった。しかし1921年布告された新経済政策（ネップ）の最初の時期に生じたブルジョア的気分は当時の文学界に失望とパニックをもたらした。その顕著な例は「鍛冶屋派」（Кузницы）の詩人，ゲラシモフ，キリーロフ等の詩の中にあられた。彼等はネップのもつ迂廻戦術の意味を理解できず，狭い個人的テーマの中にこもり，頹廢的気分の中で日々を送った。一方復興期のソヴェート文学に有力な地位を定めたのは，十月革命を承認し，そのあとに従ったが，その社会主義的性質を十分に理解することができず様々な動揺を示した同伴者作家達であった。トロツキイはこれらの作家達の特徴をとらえて《文学と革命》の中で次のようにとなえている。「彼等は革命を全体としてとらえていない。彼等には革命の共産主義的な目的は不可解である。彼等はプロレタリア革命の芸術家ではなくて，革命の芸術的同伴者である。」フセヴォロド・イワーノフの《Броне-Поезд》，レオーノフの《Барсуки》，バーベリの《Конармия》，セイフーリナの小説《Перегной》，フェージンの《Города и годы》などの小説が代表格と言われている。彼等の大部分はネップと共に文壇に登場してきた人達であった。他方，革命以前から活動しており，革命の渡来とともに次第に革命陣営側に移行してきたブロークのような詩人もいた。《Двенадцать》のブロークのように革命を自然現象とみてその本質を理解するにはへだたりがあったラウレネフの

ような作家もいた。彼は《Ветер》という作品の中で革命の典型的な人物像としてワシリイ・グリュヴィンのような気ままな反抗家の水兵を描いている。同伴者作家はソヴェート文学の中で最大多数の芸術的部隊であった。彼等は幾分イデオロギイ的な狭隘さがあったが、新しい時代と新しい人々を描こうと試みた作家達であり、その意味で彼等は当時の人々の要求にこたえることができたのであり、ここに彼等の積極的役割をそれなりに評価することができるのである。ネップの初期、プロレタリア文学には一時的危機が到来したが、ネップマンや生活の安定をようやくかちえた一般大衆があらそって同伴者作家の作品を歓迎した。同伴者文学は文壇を席捲し得たのであった。復興期の初年、同伴者文学が全盛期であった頃、国内戦を描いたプロレタリア文学が漸く、日の目をみるに至った。プロレタリア文学の主要な傾向は、声高な誇張的な労働者階級の勝利の讃歌から国内戦時代の経験の総括と一般化へ、事物のリアリスティックな表現へ、生きた人間——大いなる時代の英雄——の描写への移行であった。

(II)

復興期の初年、リベジンスキイの《Неделя》、フルマノフの《Чапаев》、セラフィモヴィッチの《Поток железа》等が出た。これらの作品の基本テーマは国内戦争であった。1921年3月に召集された第十回党大会で新経済政策への転換が提起され、農産物配分制度を農産物課税制度に移行させることが採択されることにより、農民は税の支払いによって自由に自分の過剰食料を処分することができるようになった。この新しい転換により、農村と都市の間に、自由な物々交換制度が可能となり、物々交換を発達させる意味で、ある一定のワク内で自由商業が許可され、個人資本の投下が可能となる一種の後退政策がとられた。新経済政策の第一年は1921年の空前の大凶作にみまわれ、一時パニック状態をひきおこすのではないかと危惧感を抱かせたが、大方の予想に反して農村経済に一定の振興をもたらした。この年、さっそうと文壇に登場したのがユーリイ・リベジンスキイであった。

ユーリイ・リベジンスキイは1898年12月11日オデッサで生まれ、2歳半の時、

ウラル地方のミアスクに移り住む。父は病院勤務の医師¹⁾で1920年にチフスで亡くなっている。1909年、子供の教育のために一家はチェリャービンスクに引越し、中等教育を終らせている。父親は周囲の小市民的環境にあらがって、一貫して民主主義思想を追求したインテリゲンツィアであった。この父親の精神的影響は大なるもので、リベジンスキイの後の生き方を決定づけた程であった。後年《Воспитание души》²⁾の中(стр. 16)で「何よりも人に善をしなければならぬ」という確信は父親の道徳的規範として私の心の中に深く根をおろしていた」とリベジンスキイは述懐している。1918年チェリャービンスク実業専門学校を卒業した³⁾。その頃からロシア古典文学を読みあさり、その影響の下に民主主義的なもののみ方がつちかわれた。十月革命以前にリベジンスキイは《Манифест》を読了し、二月革命後にはマルクスの歴史的文献を研究し、エンゲルスの《Анти-дюринг》、レーニンの《Империализм》をすでに読み、それらは彼自身の思想形成に大きな足跡を残した。また特徴的なことは、子供時代、青年時代を通じてウラル地方の豊かな自然に触れて、自然と共生し、共感し得た生活を送ったことにより、美に対する繊細な感覚と真理を追求する正義感に燃える心がつちかわれた。この子供時代にやしなわれた繊細な感覚は彼の青春時代、当時文壇を席捲していたシンボリスト達の詩文学への共感に発達していったとしても誇張にならぬであろう。アンドレイ・ベールイ、バリモント、イーゴリ・セヴェリャーニン、サーシャ・チョールヌイ、フョードル・ソログープ、レオニード・アンドレーエフ等が若きリベジンスキイの心をかきたてた。とりわけ彼の関心を引いたのはアレクサンドル・ブロークの詩《Стихи о России》や、《Двенадцать》であった。1919年から1920年にかけての修作時代、リベジンスキイはブロークの《Двенадцать》にきわめて類似した詩《Серый Патфидер》を書き、国内戦時代の白衛軍とたたかった事件を主題にして全体的に社会、政治的・道徳的価値感をそれに付加させようとした。

たとえば、ブロークの《Двенадцать》の中の有名なシーン

Вдаль идут державным шагом...⁴⁾

Кто еще там? Выходи!

Это — ветер с красным Флагом...¹⁾

Снег крутит, лихач кричит,

Ванька с Катькою летит...²⁾

に対峙させて、「Серый Патфиндер」⁵⁾ の中では

Мальчик голодный кричит; «Сигареты!..»

и

...ветром проносятся легкие саночки,

И вскрикивают дамочки...

Идут отчеканенным шагом,

Идут под трехцветным Флагом...

と書いている。勿論これらのシンボリスト達と並んで散文家としてのレフ・トルストイやゴーリキイ⁶⁾、チリコフ、レオニード・アンドレーエフ、イヴァン・ブーニン等に関心を寄せていた事実は否めないが、文章スタイルの新しさという点でアンドレイ・ベールイにもっとも注目した。小説《Неделя》の執筆中にもこの文章スタイルや散文のリズム感の点でアンドレイ・ベールイに負うことは多々あったのであった。例えば《Неделя》全体に響く緊張したリズム感、揚音の一定の母音ごとへの配列や語位転換や文章の簡潔化などの直接の動機はベールイの《Петербург》に直接触発されたものである。この傾向は二作目の《Завтра》におけるほうがより大となった。しかしシンボリストを模倣したこのリズムある独特な文章は必ずしも効果をあげているとは言いきれない。余計な修辭語や、比較語はかえって芸術的未熟さを露呈させている。《Неделя》の сюжет はネッ プ時代にあつて政治的にも経済的にももっとも困難な条件の

下に春季播種を組織する党の革命的ヒロイズムを高らかに唱っている。農民達は穀物配布制度に不満をもち、白衛軍の残党や都市を横行するネップマンがその現象を利用しようとする。この反革命との血みどろの一週間の闘争が生々しくえがかれている。「Неделя」の中の主人公達は党の核心たる労働者ボリシェヴィキであるが、また一方ではボリシェヴィク・インテリの代表的形象としてマルトウィノフ、スリコフなどを描き、非プロレタリア階級から党に移行してきた人間の思想改造という複雑な問題も提起されている。マルトウィノフはブルジョア出身の見事な教養をそなえた黨員である。しかし決定的瞬間になると優柔不断さと性格的弱さを露呈させてしまう。労働者のスタリマホフに言わせると、マルトウィノフは「利口な人で、言うことには道理があるが、だが、実践的な面ではまるでしゃべることとは正反対だ。あの男や、あの男のしゃべることは一文の値打もないことの場合の方が多い。」と評せられてしまう。またインテリのスリコフは反革命者たちの銃殺という決定的場面で弱音を吐いてしまう。まる裸にされ寒々とした曠野にひっぱり出された彼等をみると果して自分が彼等を銃殺に処する権利があるのかどうか、自分の中に反革命者達への憎しみの限界をみいだしてしまうのである⁷⁾。

そして「あの真裸にされた白衛兵の血が私の魂の中に飛びちったようです。——私は急にはっきり私自身が裸にされているのだ、弾丸は私の肉と骨とをつらぬいたのだ、そして私があのおそろしい心臓をひきさくようならめき声をあげているのだと、私は銃殺の決議書に署名することが出来なくなりました。」と死の直前に同志クリーミンにあてた手紙⁸⁾の中で告白している。

リベジンスキイの幼なじみであり、初恋の人でもあったヴェ・ア・ゲラシモヴァは回想記の中で卒直に次のように回想している⁹⁾。ペールイの「Петербург」、プーニンの「Деревня」のような才能豊かなきらめくばかりの文学は若者の心に全く危険でないとはいきれない。……それはむしろペシミズムや悲愴感をひきおこし、ある種の神秘的な種を精神的ひ弱な人間の心に播いた。」と青春時代のリベジンスキイの気持の奥深くまで踏みこんだ見解を述べているが、確かに幼年時代をすごした環境、またシンボリズムの影響等を考え合わせると、

むしろリベジンスキイは、彼自身の心の中の矛盾や葛藤を正直に作品の中に投影させていると言えよう。評論家の中には、シンボリズムのこのネガティブな面の影響をとりあげ、むしろこれらの諸傾向が後の諸作品、《Завтра》(1923)、《Поворот》(1927)、《Рождения героя》(1923)に間接的により込み入った形であらわれていると主張するむきもいるが、私見ではこの処女作《Неделя》(1922)にすでにその徴候がみられるといっても過言にはならないであろう。

《Неделя》に対する批評傾向を詳細に検討すると、定まった既存の評価が浮かびあがってくる。それは《Неделя》のもつ陽的部分——多くは革命的ヒロイズムの部分にのみ光をあてて青春文学の一金字塔のような称讃を惜しみなく与える論調が一般的であることである。文章スタイルや人間像の描写の仕方はさておき、内容的にみて、きわめて完成度の高い文学として評価されている場合が多い。しかし筆者はこの点を否定するものではないが、少なくとも初期の段階ではポジティブなもの、ネガ的な側面があったこともあえてここに記しておく。何故あえて過去形であるかといえ、現在の《Неделя》にはその部分が全く欠落してしまっているからである。

(Ⅲ)

ゴーリキイ文学研究者として名高いオフチャレンコ氏は、その著《От Горького до Шукшина》¹⁰⁾の中で、《Неделя》の欠点に言及するとすれば、一版ごとに自分の心の要求に従って言葉をめまぐるしく変えたり、文章を削ることだといささか皮肉まじりに論じている¹¹⁾。同じくリベジンスキイは作品の校訂をすでに1924年頃から部分的に行っている。国立中央文献研究所に保管されている1924年の監督用のシナリオの中ではすでに初版にあったセリョージャ・スリコフの真情の吐露などは削られている。作者は1932年には本格的に部分的改訂をすすめているが1937年以降のスターリンによる追放の後には20年代のリベジンスキイの全作品は出版を禁止され、1956年によりやく手直しされたものが出版された。手元にある1927年版(第4版)と1956年以降の版のものをくらべると、1924年のシナリオと同様に、スリコフの手紙の箇所、1章全体がバッサリと削

除されている。これはスターリンの検閲によるものであるかどうか、疑いも抱かれるが、1924年のシナリオには、すでにこの部分が欠落しているとすれば、検閲とみるのはいささか早計であろう。スターリンのリベジンスキイに対する決裁は後にも触れる如く、党籍剥奪と20年代の全作品の発禁ということに徹していたらしいのである。削除されたセリョージャ・スリコフの手紙の部分を「病的な精神的な苦悶の吐露」¹²⁾とみなすことは容易なことであるが、このような党コレクチヴの影の部分をリアリスティックに提示することにより、陽の部分——すなわち、革命闘争のヒロイックな側面がより尖鋭に描き出されることに大きな芸術的効果をあげている。このような相反する二つの側面を対比させることによってより陰影に富んだ重層的な作品をつくり上げることに成功をきしたのであるが、1956年以降、作者の意志によるこの削除はきわめて惜しまれることである。先にも触れたようにオフチャレンコ氏はこの度かさなる削除の小史を極めて手厳しく批判めいた調子で言及しているが、私はむしろここにこそリベジンスキイの人間的な資質を垣間みたように思えてならない。つまり《Неделя》における光と影の部分はリベジンスキイ自身の心の投影とみたら短絡であろうかということである。繊細で感受性の鋭いインテリ出身のリベジンスキイは理性的には革命の意義を正しくとらえることができるが、情情的にはスリコフに共感している部分があり、ブローク的なパトスの域を出ていない。そしてこの二つの部分の相克がリベジンスキイの中でたえずなされていたといったら過言であろうか。このディアレクティブな相克と葛藤は時として文学において実に豊かな結実を示唆するものであるが、後の作品のように破綻的にあられる場合もあった。作者は何故スリコフの告白の部分を作品から抹殺したのであろうか、答えはきわめて容易なものである。作者の中にスリコフ的な要素があればある程、それをラジカルに捨象したいというのが人間らしい性情なのであるまいか。

(IV)

1923年、リベジンスキイは《Завтра》という小説を書いているが、この作で

は現実には破壊され、芸術的な形象も描かれてはいない。この失敗作に関してリベジンスキイ自身は「そもそもネップの末期から復興期の始まりまでを描くということは基本的な嘘であった」と反省している。リベジンスキイはネップの各層に及ぼした複雑きわまる問題を取りあつかったが、その中心的思想には、ヨーロッパに革命が起らなければロシアは破滅するというトロツキイの永久革命論の反映であった。またシンボリズムの影響も《Неделя》におけるより大きく、とりわけアンドレイ、ベールイの影響が顕著であった。続いて1925年に出た《Комиссары》の中心テーマは《Неделя》の延長線上にあるものであった。新しい段階にいたった党、ネップへの転換期における党の問題が主要なテーマであった。作者はコノノフやロビイチェフ等の労働者黨員像を示すことにより、新しい局面における党の幹部のあり方に関して問題提起をしている。国内戦を戦いぬいたコミッサール達はネップの新局面において、平和な新しい生活を迎えるがそれにまだ馴れていないためにぎこちなさを感じる。そこには静かな家庭的な小市民生活があり、嵐のような革命精神を喪失する危険があった。コミッサール達は新しい時代に即応した幹部になるため再教育のために6ヶ月の軍政高等学校に送られてくる。彼らの多くは指揮官としては優秀であったが自分自身を統率することには馴らされていず、完全な意識的なコミッサールとはいえなかった。ネップへの転換期にこの学校は階級間における闘争とその闘争の諸現実への反映として映し出される鏡となったのである。作者は様々なタイプの間像を提示し得た。鍛錬された強固なボリシェヴィク、疑惑と錯乱のうちにネップへの転換を経験する動揺者、クラークの利益を公然と擁護するもの、プチブルなどをリアルに描いてみせたのである。《Комиссары》の登場人物は《Неделя》より更に平明にリアリスティックに描かれているが、まだかなり図式化や性格描写の不完全さが残されていた。《Комиссары》の執筆は当時すでに《Разгром》の執筆を開始していたファージェーエフとの直接的親交がひき金となっている¹³⁾。すでにプロレタリア文学運動の団体「ВАПП」に入っていたリベジンスキイはアベルバッハと共に多数派を形成し《На литературном посту》を発行した。1926年3月に発行された創刊号でアベルバッハとリベジンスキイ

によってプロレタリア・イデオロギイと高度の芸術性との一致が叫ばれ、「生きた人間」の描写が主張された。1927年の ВАПП 総会でリベジンスキイはこの主張をファジェーエフの《Разгром》をとりあげたことによって一般的なものにした。総会の席上、この《Разгром》を問題の中心にすえ、プロレタリア文学の新段階を論じた。「《Разгром》はプロレタリア文学の全く新しい段階の作品である。この新しい段階の本質はどこにあるか？ それは今やわれわれが個人的な心理に今まで以上に多くの注意を集中させようとすることである。以前では何らかの形でコミッサールがいるとすれば、彼にはこれこれしかじかの特徴が付与されねばならない。そこでわれわれはそうした特徴を付与して行動せしめた。——中略——すべての人間には根本的な一定の、個人を規定する階級的傾向があるが、その他、極めて複雑なイデオロギイ的、心理的側面があり、人間の中でそれが階級的傾向と戦っているのである。この意味において、プロレタリア作家なるものは、具体的な人間を複雑な内面的プロセスと共に与えることが肝要である。これこそがわれわれが現在体験しつつあるプロレタリア文学の、新段階の根本的命題なのである。」

1928年5月に第一回全ソプロレタリア大会が開かれ、その席上、ВАППの解消と、各作家同盟ごとの統一機関 ВОАПП が形成された。その結果、全ソの中核的勢力としてロシア・プロ作家同盟 (РАПП) の名が浮上してきた。この大会でリベジンスキイは「РАППの芸術綱領」という題の報告をし、「プロレタリア文学」の創作方法をはじめて前面に押し出した。彼は「生きた人間」の描出のために「直接的印象¹⁴⁾」を主張し、心理を掘り下げること、様々な階級の典型的心理内容を完全に述べること——「心理主義的リアリズム」のスローガン¹⁵⁾を提唱した。この提唱の具体化をリベジンスキイは1930年の《Рождение героя》という作で実現させようと試みたが、作中人物の体験を社会生活と階級闘争からきりはなした形でかえってゆがめた現実を描写してしまうことになった。つまり余りにも個人の心理解剖に偏向することにより、個人対階級の図式により、個人の優位な視角からのみ物ごとをみるという傾向に陥り、作家に現実をありのままに描かせることは不可能であった。リベジンスキイはこの創作

上の理論的誤謬を如実に悟り、1931年に《Петя Гордюшенко》の中で、社会主義建設に励む若い労働者の形象を通して新しい人間像の提示に成功した。これは当時のスターリングラードのトラクター製作所に働いている、もと浮浪少年の瑞々しい生産現場での姿をとりあげたものである。それに続き《Накануне》(1933)、《Рассказы товарищей》(1933)を發表して以来、1940年の《Баташ и Батай》まで全くの沈黙の作家となっていた。

(V)

このリベジンスキイの長い沈黙に対してオフチャレンコ氏は一体それが何故の沈黙なのか¹⁵⁾、いら立ちをもって疑問を投げかけている。オフチャレンコ氏自身の意見によれば、「この作家としての危機の原因の一つは、一般論的にいえば全体としてリベジンスキイ自身の努力が足りないこと、また部分的には才能に恵まれているにもかかわらず、芸術的精進を怠っていること、人間の文化的達成に対するたゆまざる努力が必要とされているにもかかわらず、その努力をしようとしなない」ことにあると断定的に述べている。この投げかけられた疑問はもしオフチャレンコ氏がソヴェート人としてスターリン時代をくぐってきた同世代人として発せられるのであれば余りにも苛酷なものと云わざるを得ないであろう。(筆者は特にリベジンスキイを擁護するために述べているのではなく、第三者的な立場から客観的に述べているにすぎないことをここでおことわりしておく。) 前述の如く、リベジンスキイ研究家の Медведева 女史の調査によれば第二次大戦の直前までリベジンスキイが書いた作品のすべてはスターリンによって発売禁止となっているという事実は動かし難い事実である。発売禁止の裏にはスターリンの影が重くのしかかっていたということは云うまでもないことであった。この意味でリベジンスキイはこの時代の多くの作家と同様に典型的な作家人生を送ることを余儀なくされたのであった。更にオフチャレンコ氏はそれに追いつけかけないように「評論家諸氏の警告にもかかわらず、文学における自分の成功からくみ出した総括を全くやっていない(作家はこのような総括を不成功のみならず、成功した時もやらねばならない)¹⁶⁾」こと

などに言及している。しかしながらもしも作家が若くしてその処女作で一大センセーショナルな名声を得てその作家的地位を不動なものにし、党のために日夜身も心も献げる正心正銘な党员作家として歩んできたという自負があるとするなら、また創作活動においていくつかの誤謬があることを認め自己批判に努めた身にとっては、スターリンによる突然の党からの一方的追放は全く理解の範ちゅうを越えたものとしか云いようがないであろう。この間の事情はリベジンスキイの初恋の人であったマリアンナ・ゲラシモヴァとの往復書簡¹⁷⁾に述べられているので以下引用する。1937年のリベジンスキイ宛の書簡の中でマリアンナは次の如く書いている。

「あなたがその事件に対して、党员として当然そうあるべく、勇敢に立ちむかったことを私に書いてくれたので感謝しています。あなたはその柔和な外観の下に強い信念と力をもっています。そしてあなたは今までに経験したこともないような重い荷をもちあげようとしてるんだわ——中略——あなたが白衛軍に逮捕され、罪をとがめられ、白衛軍の地下組織で赤衛軍の側への橋わたしを組織したことも忘却のあなたに追いやることは可能だわ。だけれどももしあなたでなく、誰かほかの人なら、勇気をもって自分の罪をみとめ、苛酷で自暴自棄的な資格証明書が与えられることが必要かもしれないけど、あなたは片時でも自分の政治的態度を失わないようにして欲しい、……略……」¹⁸⁾

1937年のリベジンスキイの党からの追放の二年後にマリアンナ・ゲラシモヴァも投獄される運命になる。1939年12月リベジンスキイはスターリン宛に直訴の書簡¹⁹⁾を書き、友人のファデーエフが個人的にポスクレブィシエフの手にわたすことにより当然スターリンの手に入っている筈であったが、とうとう一通の返事もなかったことが、《Зеленая Лампа》の中で語られている。この回想記を更に読みすゝむに及んで、マリアンナ・ゲラシモヴァの予期せぬ悲劇的最後に遭遇せざるを得ない。シベリア送りになったマリアンナは重度の精神病にかかり、自宅に送り還されるが、その後周囲の看病のかいもなく、自ら果てたという事実である。

こうしてソヴェート政権下ネップ時代に『青春文学の不滅の金字塔』をうち

たてたりベジンスキイも好むと好まざるとにかかわらず、他のソヴェートの作家達と同様、政治と文学のはざまに浮かぶ小舟のようにおどらされ、時代の熾烈な烙印を押されざるを得なかったのである。ファシスト戦後、復権を認められたリベジンスキイは再び、燃えつきた情熱をかきおこすかの様に《Горы и люди》, 《Зарево》, 《Утро Советов》などを世に出し健筆をふるうが、かつての名声はすっかり影をひそめ、現代のソヴェート人達のとりわけ若い世代には殆んど忘れられた存在となっている。リベジンスキイと無二の親友であったファジェーエフは、1956年リベジンスキイから《Неделя》の改訂版を送られた時、彼に次のように書き送っている²⁰⁾。「《Неделя》と《Комиссары》をありがとう。これはすでに歴史です。われわれの世代にとっては正に青春であり、初恋そのものでした。」

Примечания

- 1) Юрий Либединский и его повесть «Неделя» Душанбе 1963, с. 13.
- 2) Там же с. 14.
- 3) Там же с. 27.

Это время совпало с другим важным событием в жизни юноши——весной 1918 года он закончил Реальное училище. В «Свидетельстве» на его имя, сохранившемся в Челбинском областном госархиве среди документов реального училища, мы читаем, что «... ученик дополнительного класса Челябинского реального училища Либединский Георгий Николаевич... при окончании полного курса... оказал следующие успехи: в русском языке——отличные (5)...». ² В остальных предметах успехи, правда, были весьма скромные. Но ведь завершение учебы означало выход в самостоятельную жизнь, возможность полезной работы, полной отдачи бурным событиям революции...

- 4) Александр Блок пол. соч. собр. «Советский писатель» 1946, с. 582.
- 5) Там же с. 41.
- 6) Анна・カラカーエヴァとの対談の中で Либединский はゴーリキイ観を次のように述べている。

Вопросы Литературы 1962. 5.

(в беседах о литературе—Аниа Каракаева)

— Да, да! Я вот подобным же образом себе это представлял!...Какой только дряни и убожества не торчало тогда на дороге «буревестника

революнии»!—с презрительной иронией усмехнулся Юрий Николаевич. — Декаденты, мистики, эстеты, эгофутуристы салонного типа вроде Игоря Северянина, сологубовщина, арцыбашевщина, всяческая нежить и мертвечина... А реализм Горького великанским шагом шел себе вперед и вперед, а жизнь, идущая навстречу величайшей в истории революции революции, обогащала его. Дружба его с Лениным — какая великая это была школа и какое счастье!.. И вот партия раскрыла перед нами все это богатство, зажгла нашу партийную совесть чудесным огнем... работать, работать!

- 7) Гос. изд. Книга характеристик статьи о современной литературе 1928 г. автор: В Вешков с. 202. Силуэт Ю. Либединского

Чувствовалось, что рассказывает о нем не только очевидец, но и участник событий. В особенности такое впечатление производило письмо чекиста Сергея Сурикова, предел ненависти которого к врагам пролетариата был перейден, по выражению повести. Предел ненависти к пролетариату его врагов также был перейден, так как чекист Суриков был ими живым закопан в землю. Письмо чекиста, закопанного живым в землю и рассказавшего перед смертью с жуткими подробностями о том, как расстреливали группу белогвардейцев, конечно, должно было производить сильнейшее впечатление независимо от того, как оно было написано с художественной стороны.

- 8) Личное письмо Сурикова из «Недели» 1927.

ГЛАВА VII.

„Дорогой товарищ Климин! Сейчас я на станции Н-ск. Глебов ушел за подводой, его нет уже часа четыре. Станция маленькая, и я совершенно один. Пересмотрел старые, еще довоенные рекламы и объявления, не гармонирующие с жизнью теперешней, полюбовался чудесным плакатом на тему о под'еме транспорта, потом забрел в отделение Орточека, и при виде пера и чернильницы—у меня появилось желание, мысли, которые бродят сейчас в моем уме, переживания, которые тревожат сейчас мою душу, откровенно рассказать вам. Почему вам, тов. Климин, вы, верно, поймете. Вспомните, как в Политотделе Н-ской дивизии, вы, старый член партии, начподив, терпеливо часами беседовали со мной, тогда беспартийным, самоуверенным мальчишкой, голова которого была забита всякой интеллигентской дребеденю. Вы терпеливо выслушивали мои нелепые рассуждения, ловко вышибали из-под меня почву, потом натаскивали меня на марксизм, терпеливо рассказывали мне азы классовой борьбы и социализма. В партию я

вступил уже в полку, позднее, но в сущности коммунистом меня сделали ваши уроки. А когда вы ушли в Ч. К., я, по ликвидации фронта, пошел к вам работать. И под вашим руководством я стал настоящим революционером и коммунистом. Вы для меня были идеалом коммуниста. Оттого я не пишу ни матери, ни другим товарищам, знавшим и любившим меня, а именно вам, моему начальнику, в кабинет которого в рабочее время я не могу войти без доклада.

Это письмо вы получите только в том случае, если меня убьют. А в том, что меня убьют, я почти не сомневаюсь. И это хорошо, потому что мне в жизни делать больше нечего, я не человек, а только скорлупа человеческая, и теперь в моей душе совершенно пусто. Так пусть я хоть умру с пользой для коммунизма.

Но, чтоб вы меня поняли, я расскажу вам все по порядку.

Помните, как в прошлом году, после того, как раскрыли заговор по всему краю, мы ездили расстреливать пятерых белогвардейцев.

Была морозная зимняя ночь. С колдовской луной, окруженной кольцом. Наш грузовик быстро бежал по блестящему, отполированному полозьями тракту. С нами был Лежавин. Он волновался, так как первый раз был на расстреле, держался неестественно весело и оживленно и разговаривал то с вами, то со мной. Вы, как всегда, деловито и исчерпывающе отвечали, но в ваших ответах была еле уловимая интонация: „мальчик, не притворяйся; тебе не по себе”. Я отвечал ему односложно. Мне не хотелось говорить; я слишком устал за день и отдыхал в безмолвии этой синей, слегка морозной ночи... Порой я оглядывался в кузов, видел “их”, видел настороженные лица ребят, вспоминал, куда мы едем. Становилось неприятно. Но ведь я участвовал не в первом расстреле.

Мы вехали в монастырский лес, в сборище волшебных деревьев, заиндеветших, похожих на предсмертные мечты замерзающего. Иногда деревья расступались, и видны были зачарованные синие полянки. На одну из таких полянок мы прошли по узенькой тропинке. Там была старая заброшенная каменоломня, зимой заваленная снегом и все же кажущаяся тлубокой, черносиней ямой.

По дороге все молчали.

Они вели себя хорошо и тихо ждали смерти. Я как-то не задавался вояросом, о чем в последний раз думают эти люди, казалось, такие безучастные ко всему. Я все уже заранее принял в те минуты, когда просился у вас на работу в Ч. К. заранее знал все, что будет... Отвратительнее всего минуты, когда целишься в беззащитную кучку лю-

дей. Но все это скоро кончится и после гулкового залпа, от которого ближние березы уронят снежную пыль, пять человеческих тел упадут глубоко, глубоко в черноту каменоломни, а мы поедем обратно и опять будем слушать колдовскую зимнюю тишину.

Но вышло не так, как я ожидал... Вполголоса вы сказали им:

— Раздевайтесь, граждане!

Они переглянулись. Один скинул полушубок. Другие последовали его примеру.

— Нет, совсем раздевайтесь,—сказали вы и добавили, как будто для нашего сведения,—нагишом будем расстреливать...

Ребята угрюмо молчали, и в их молчании чувствовалось, что они с вами согласны, что они вас понимают и готовы расстреливать нагих людей. Было очень тихо, и только издали, с дороги, могуче гудел мотор нашего грузовика.

Тогда они стали протестовать. Вы помните их протесты? Один говорил, что человеку нужно облегчить смерть; другой—что это издевательство, а старший учитель-черносотенец высокий, с продолговатой седой бородкой и покатыми плечами, вдруг жалобно, по-детски заплакк, сквозь слезы он говорил, что это „не хорошо” так делать, что у него инфлуэнца. Я знал, что он служил охранке, выдавал своих учеников и за это получал ордена, знал, до какой степени велика его ненависть к нам, и все же тело мое стало трясти мелкокоржью, словно это меня заставляли раздеваться... А тут еще голос Лежавина говорил вам:

— Тов. Климин, не надо так делать. Не надо издеваться над ними, зачем?—в его голосе слышались слезы.

Кто-то из ребят злобно выругал его. Вы сказали:

— Но к чему же, чтоб гибла одежда? Ведь в это белье и платье можно будет одеть кого-нибудь полезного республике. Через минуту им эта одежда нужна не будет,—и добавили тихим шопотом, обращаясь к Лежавину:— Не вносите дезорганизацию. Идите к автомобилю и ждите Нас.

Тогда они поняли, что нет исхода... Сиделись на пни, стас кивали с себя сапоги и брюки, скидали нижнее белье. У тех, которые были в прозрачной тени деревьев, тела казались зеленовато-желтыми, какими они кажутся сквозь прозрачную, озерную воду. У других лунный свет делал тело белоглубым... Ах, как все это безмолвно и непонятно, как в страшном, неповторяющемся сне, в каком-то морозном кошмаре.

В эти места я не раз ходил летом. Мне хорошо была знакома старая,

раздвоенная сосна, у которой мы стояли. Я знал каждую ее ветку. Я узнал сделанные топором большие засеки на нижней части ствола.

Я любил эту сосну, но она мне казалась странно-чужой и враждебной. Такой чужой и враждебной бывает бывает Мать в те страшные минуты, когда ее видишь в кошмаре, чужой, безжалостной, равнодушно-спокойной к тебе, к твоим протянутым рукам, к твоим мольбам о помощи. Вид этих людей, раздевавшихся на морозе, вызвал вдруг перед моим воображением картину купанья на берегу озера в жаркий солнечный день. Ассоциация дикая, но я чувствовал, что мои мысли путаются, и хорошо, что гулкий залп разом снял эти чары.

Вы помните меня го этого расстрела? Я с увлечением участвовал в работе Ч. К. и гордился этим участием! Я легко подписывал заключения на следственных протоколах и без малейшего содрогания сам приводил в исполнение смертные приговоры. И все это потому, что я твердо знал, да и теперь знаю, что это—кровавый путь, но путь единственный из того ужаса, который называется капитализмом. Я жалел людей, страдал их страданиями, Но знал, что только через смерть врагов революции возможен путь к коммунизму. Оттого я был так беспощаден. Я свою великую жалость перевоплотил в великую ненависть. И я думаю, что так делает каждый коммунист.

Настанет время, и я надеюсь, что оно скоро настанет, и эта великая человеческая жалость сделает прекрасной жизнь людей на земле. Тогда страдания ближнего будут больно ранить человека. К чужому организму, к этому прекрасному человеческому телу, которое устроено так же, как и мое и как ваше, которое так же мучится и страдает, будут относиться с величайшей бережливостью. Это будет так! Но сейчас эту жалость нужно перевоплощать в ненависть. И до этого расстрела я умел это делать.

А тут, точно кровь этих нагих белогвардейцев мне в душу брызнула! Все вспоминаются мне они, раздевающиеся при свете лупы, их дрожащие нагие тела, грохот выстрелов и стоны... Эти ужасные стоны, раззующиеся из каменоломни! Стоны теряющего себя, умирающего тела! Вы, может, назовете это мягкотелостью, но знайте, когда они раздевались, я вдруг ясно, ясно представил себе, что это я раздеваюсь, что мое тело хватает мороз, что мои мускулы и кости нижут пули и что я стону ужасным падрывающим стоном.

Я разучился подписывать заключения на расстрел... Допрашиваешь, а сам смотришь в эти живые глаза, на эти руки, следишь за игрой морщин на лице и ни на минуту не забываешь, что перед тобой враги,

и все же думаешь: неужели моя рука пошлет этот организм на смерть?

Предел ненависти для меня перейден. Но уйти из Ч. К. я не хочу, потому что считаю работу чекиста самой революционной и необходимой в настоящее время.

Так пусть лучше смерть... И когда я буду страдать перед смертью — непременно буду помнить о том, что я сам мучил и расстреливал.

А, может-быть, это, правда, мягкотелость! Может-быть, На той работе, которая мне сейчас предстоит, я закалюсь и опять стану стойким и сильным. Пусть же эта командировка будет моим искусом.

Для коммуниста каждый день—испытание—искус, так как во всех нас сильно тяготение к старому.

О нас, о молодых коммунистах, и говорить не приходится. Мало у кого хоть голова наружу, а большинству этот старый мир через голову перехлестывает, затемняет слух и взор и мутит мозги. Поэтому всегда за собой следить приходится. Не свернул ли с правильного пути? Не путаешь ли чего? Не суановишься ли обывателем? И я не хочу стать слезливым толстовцем-интеллигентом... Так пусть же будет искус Физических страданий, тяжелой нервной работы, может-быть, смерти. С этой работы я или вернусь перерожденным и укрепленным, или совсем не вернусь.

Но буду знать, что, если я, ослабший, выбыл из строя, то такие, как вы,—корень и ствол партии,—остались, что борьба продолжается, и коммунизм будет на всей земле.

Живите и работайте хорошо.

С. Суриков”.

9) В. А. Герасимова Воспоминания, С. 13

Нельзя не признать что пессимистическое, скептическое начало предреволюционной литературы, а также ее формалистические изыски действительно сказались на мироощущении юноши, серьезно осложнив его идейные и художественные искания на пути к «Неделе». А затем они же—непросто и непрямо—проявились и в таких его произведениях, как «Завтра» (1923), а в определенном смысле и в «Повороте» (1927), «Рождении героя» (1930).

10) А. Овчаренко «От Горького до Шукшина» Современник, Москва 1982 С. 105

11) там же.

12) Юрий Либединский и его повесть «Неделя» С. 143.

13) Как я работал над «Комиссарами» Лит. учеба 1931, №. 10, С. 95.

14) На лит, посту. Творческче группировкч пролетарских писателей の中の

論文 С. 119—130.

«Об отображении и осмысливании»の中にこのことについて言及している。

15) А. Овчаренко «От Горького до Шукшина» С. 107.

На мой взгляд, одна из причин кризиса заключалась в недостатке у писателя общей культуры вообще, художественной культуры в частности, в необработанности его таланта, в слабом развитии сильных сторон дарования — развитии, требующем непрерывного творческого усвоения культурных достижений человечества, наконец, в неправильном понимании писателем того, что можно назвать культивированием эмоциональной стороны поэтического таланта. Вопреки предупреждениям критиков Ю. Либединский не сделал вовремя всех выводов из своего успеха в литературе (а такие выводы писатель должен делать не только из неудач, но и из успехов), не учел того факта, что немалую роль в удаче сыграл сам материал, обработанный в «Неделе» и «Комиссарах», а также атмосфера, в которой они появились.

16) Там же. С. 107.

17) Зеленая лампа リベジンスキイ夫人—リダイヤ・リベジンスカヤ (現在モスクワで児童文学者として活躍中) —の回想記 Советский писатель Москва, 1966. С. 225—228.

18) Там же С.225.

19) Там же С. 226—227.

20) 10 апреля 1956 гоуа. Личный архив Юрия Либединского

Материалы

Произведения Ю. Н. Либединского

Собрания Сочнений, Избранное

◦ Собрание сочинений избранное

Т. 1 Коммунисты (Три повести)

(Неделя—завтра—комиссары)

(Послесловие автора М.-л., “Земля и фабрика” 1927 479 С.

◦ Сочинение (В 2-х т.) Л.-м., Гослитиздат 1931 Т. 1 224 С.

Содержание; Неделя—Как я работал над “Неделей”—Завтра—Почему мне не удалось »Завтра”

Т. 2 (Комиссары—Моя критика “Комиссаров”) 242 С.

◦ Избранные произведения В 2-х т. М

Гослитиздат 1958 Т. 1 568 С.

Содержание; Неделя—Комиссары—Гвардейцы—Сослан богатырь, его

- друзья и недруги.—Комиссары (воспоминания)
 Т. 2 Горы и люди Роман, 552 С.
 Сборники и Отдельные издания
 Романы, повести, рассказы, воспоминания, очерки
- Неделя Повесть Пг.—М., “Моя гвардия” 1923 102 С.
 То же, (С биографической справкой) М., “Правка”, 1957 63 С. (Б-ка “Огонек” № 44)
 То же, Рис. И Гринштейна, М., Гослитиздат 1957 127 С. (Школьная б-ка)
 - Завтра Фотомонтаж худож. С. Сеникина и Г. Клуциса. М.—Л., “Моя гвардия” 1924 88 С.
 В коллективе М., “Огонек” 1925 56 С. (Б-ка “Огонек” № 98)
 Содеж. Два заседания—В комроту—Субботник—Демонстрация—Класс и каждый—В строю.—Торжественное заседание ячейки
 - Рабочие портреты: (Рассказ рабочего Химик—завод) М., “Моск. рабочий” 1925 46 С.
 - Комиссары Л., “Прибой” 1926 170 С.
 То же, Вступительная статья и примеч. И. Матбиц—Верова. (С отзывами критики)
 М.—Л., “Земля и фабрика” 1929 280 С. (Б-ка современных писателей школьная серия)
 То же, Со старшей Ю. Либезинского “Моя критика”, “Комиссаров” Л.—М., Гослитиздат 1932 288 С.
 То же, Изд. 14-е, переработ. Худож. Мочалов Л. Гослитиздат 1935 268 С.
 - Коммунисты (Три повести) (Неделя—Завтра—Комиссары. послесловие автора) М.—Л. “Земля и фабрика” 1927 481 С.
 - Поворот Роман Кн. 1 М.—л., “Моск. рабочий” 1929 206 С.
 Отрывок из романа выходил отд. изд. под назв.: Два работа М., “Огонек” 1929 80 С. (Б-ка “Огонек” № 407)
 - Рождение героя Л., “Прибой” 1930 180 С.
 (Соврем. пролет. литература)
 То же, Изд. 2-е Л.—М., Гослитиздат 1931 186 С.
 - Петя Гордпошенко Москва—Саратов 1931 30 С.
 (Б-ка Нижневолжской ассоциации пролет. писателей)
 - Накануне Л., Изд. писателей в Ленинграде 1933 193 С.
 - Рассказы товарищей М., “Сов. Литература” 1933 174 С.
 Содерж.: От автора—Девятнадцатилетний—Мечка о машине—Пример отца—Задаткихудожника—Дорога из местечка—Через крапиву—Сое-

- динить пролетариев—Рассказ без улыбки—Кухаркин бог.
- Баташ и Батай М., “Сов. писатель” 1940 228 С.
 - Гвардейцы Повесть (Ч. 1) Саратов Обл. изд., 1942 48 С.
То же, М., “Сов. писатель” 1944 244 С.
Отрывок из повести выходил отд. изд. под назв.: Они стали гвардейцами М., Воениздат 1950 48 С.
 - Пушка Югова Повесть, Магадан, “Сов. Колома” 1946 137 С.
 - Горы и Люди Роман, М., “Сов. писатель” 1954 708 С.
 - Сослан-богатырь, его друзья и враги
(По мотивам Нартского эпоса)
(Илл.: Л. Фейнберг) М.—Л., Детгиз, 1950 215 С.
То же, Сказочная повесть по мотивам нарского Эпоса, Рис. Л. Фейнберга М., Детгиз, 1959 222 С. с илл.)Школьная б-ка)
 - Зарево Роман М., “Сов. писатель” 1952 844 С.
То же, М., Гослитиздат, 1960 712 С.
 - Будете счастливы (Кубанская быль—Новое море) Рассказы М., “Правка” 1953 48 С. (Б-ка “Огонет” № 47)
 - Повести: Неделя—Комиссары М., Гослитиздат 1956 256 С.
То же, М., Гослитиздат 1956 256 С.
 - Сын партии Повесть о С. М. Кирове рис. Л. Хайлова М., Детгиз 1956 315 С.
В соавторстве Э. Блок
То же, (Изд. 2-е доп. и Меребабот Илл.: Л. Хайлова Кн. 1) М., Детгиз 1960 261 С. с илл
(Школьная б-ка для сред. школы)
В соавторстве с Э. Блок
 - Коммунисты М. Детгиз 1957 47 С. с илл.
содерж.: О чем тогда говорил народ—Пароль братства—Шахтер, Библиотекарь—Время наших отцов—Оркестр в цехе—Сергей Миرونвич—Он погиб коммунистов—Между Тулой и Орлом—И снова впереди коммуниста
 - Утро Советов Роман (Илл.: С. Бродский) М., “Сов. писатель” 1957 818 С. с илл.
То же, М., “Сов. писатель”, 1959 784 С.
 - Поездка в Крым (Оположенцы Красной Пресни С биограф. справкой) М., “Правда” 1960 48 С. (Б-ка “Огонек” № 4)
 - Воспитание души Воспоминания Рис. В. М., “Дет. Лит ра” 1962 208 С. с илл. и с портр.
Содерж.: В. Инбер О нашем друге—Ч. 1 Зовы грядущего—Ч. 2

Знакомство с Марксом — Ч. 3 Тревожная юность — Ч. 4 Солдатское воспитание

- Связь времен Воспоминания, повести, очерки, рассказы М., “Сов. писатель” 1962 928 С. с портр.

Содерж. : Воспоминания : Воспитание души—Поездка в Крым—Рассказы Очевидцев : Октябрьская быль—Кухаркин бог.—Рассказ без улыбки—Дорога Кавказкие повести : Наследники—Саньят Баташева—Минувшим летом. Киноповесть—Рассказы товарищей : Девятнадцати летний—Мечта о машине—Пример отца—Задатки Художника—Дорога из местечка—Через крапиву—Соединить Пролетариев—Из военных тетрадей : Ополченцы в походе—Из дневника 1941 г. Ночь перед боем Повесть—Скворцы прилетели—Хмурая весна—Живой Очерки и рассказы : Большое сердце—Расставание—Кубанская быль—Прогулка—Кот—Одноух—Новое море—На осетинской земле—По древним тропам и новым дорогам—Мечта воплощается—Свойство—Связь времен

- Дела семейные М., “Сов. писатель” 1963 215 С.

“Пьесы”

Высоты (Печаталось также п.д назв. 1927 (Высота) Драма в 4-х д., 8-ми карт.

С послесл. Либединского и добавлениями л., “Прибой” 1930 166 С. (Соврем. пролет. лит-ра)

1927 (Высоты) Драма в 4-х д. Л.—М., Гослитиздат 1932 121 С.

“Книги по вопросам литературы”

- Учеба, творчество и самокритика М. Л., “Моск. рабочий” 1927 112 С.

- Современники Воспоминания М., “Сов. писатель” 1958 359 С.

Комиссары Повесть 1925

Друзин В. (Прибой Альманах Кн. 1) “Звезда” 1925 № 5 С. 278–280 То же : “Красная газета” (Веч. вып.) 1959, 19 ноября

Осинский Н. Литературные заметки “Правка” 1925, 26 июля

Лежнев А. Литературные заметки “Печать и революция” 1925 № 8, С. 122–123

(Б. п. Прибой Альманах кн. 1) “Красная новь” 1925 № 9 С. 282–283

Зорич А. (Прибой Альманах Кн. 1) “Правда” 1925, 9 окт.

Горбачев Г. Пролетлитература к Новому году “Красная газета” (Веч. вып.) 1962, 2 янв.